

# 木村文助研究

通信 25号 二〇一二年・五・一〇

道教育大函館校高橋孝之朗氏が

卒論に木村文助をテーマ・

高橋さんは卒論に綴り方教育を選び北斗市郷土資料館の「赤い鳥・木村文助コーナー」へ訪れた。資料の多さに驚き、約一年間調べ、卒論にした。「涙」や「橋」が引用され七一ページにまどめている。

- 第一章 綴り方教育についての概要及び郷土教育
- 第二章 木村文助の教育
- 第三章 まとめと今後の課題

以前に道教育大岩見沢校の女子大生も同コーナーを訪れ卒論にまどめている。

平成23年度 卒業論文  
「木村文助の綴り方教育と郷土教育」

北海道教育大学 函館校  
人間地域科学課程  
人間発達専攻  
教育学分野  
高橋孝之朗

二〇一二年

- 二一・一〇 「木村文助研究」通信24号発行
- 二一・一一 北秋田市議会事務局より木村文助記事載った「秋北新聞」
- 二一・一二 札幌市平中忠信氏より「木村文助先生を描く合唱劇を見る」を昭和中学校同窓会会報」に載った自筆の「ピ」を頂く
- 二〇一二年
  - 一・六 北斗市教育広報「きらめき」No.23に綴り方「酒のみ」高一村本金弥、「妹の靴」高一寺田ちよ 載る
  - 一・一一 「赤い鳥」原本二冊（大正一五年三・五月号）を七飯町原谷紀昭氏より寄贈
  - \*三月号には推奨一点、入選一点、五月号には推奨一点載る
  - 二・八 北海道教育大学函館校高橋孝之朗の卒業論文「木村文助の綴り方教育と郷土教育」届く
  - 三・五 「ガリ版ものがたり」へ志村章子著へ届く（木村文助の綴り方教育載る）
  - 四・三 北斗市教育広報「きらめき」No.24に綴り方「稲刈り」「高田島たき、自由画「植木」尋5中村かん 載る

## リーフレット紹介

2009年に「木村文助の足跡 生活綴り方指導の先駆者」を作成。2011年に更新した。また同年に「綴り方生活 村の子供」を作成し、郷土資料館に置いている。

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(つづかた)や絵を投稿し次々と入選。「日本の綴方学校」と言われました。

酒のみ

大野小高一 村本金彌

或日、僕は学校から帰って行ったら、僕の家の土間へむしろをしいて寝ている人があった(いた)。僕はびっくりして、そばへよって見ると、へどを上げて(吐いて)ぐうぐうとうなって苦しんでいるのであった。家の人に聞いて見たら、「その人はさつき店へ行って酒をのんで来て、うちの前に寝て、雪が顔にかかって、まっかになつてあったから、うちの中へ入れて寝せたんだ」と言いました。そして、そのへど(吐いた物)の中に三十一銭入っていると言いました。

しばらくたつと目がさめたか、起きて自分のへどを上げたのを見て、つばをしてあった(唾を吐いていた)。水で口をすすげばなおるだろうと思つていました。それからまた、眠りはじめ

こせなんて、えばつてあった(いばつていた)」と言うと、「そうでしたか」と答えて笑つていました。

(大正十二年四月号)

妹の靴

大野小高一 寺田ちよ

この頃、長靴が大流行になつて、大抵の人は長靴をはいて歩いてるので、妹がちよこちよこ外へ出て行つてはすぐ帰つて来て戸を開けながら、母に「長靴買ってくれ、買ってくれ」と何へんもはたる(ねだる)ので、母は「もう少し経つて函館に行つて買つてくれるから」と言うので、また外へ出た。それから寝ても起きて「買ってくれ」としきりにはたつた。

或朝も早くから起きて、はたつている所へ父が起きて来たたら、こんどは父に「買ってくれ、買ってくれ」と言つた。父はあんまりきかないので、「長靴も何も買ってけない(買つてあげない)」と、わざと言つたら、妹はぶんぶん怒つて、朝飯も食べないであった。ご飯を食べてしまつて、後をしまつていたら、父は私に「後をしまつたら、花子に長靴を買つて来てやれ」と五円札を

渡した。そばでそれを聞いていた花子は、今まで怒つて口を尖らせて下を向いてあったが、急に顔を上げて笑い出した。そして、「早く後をしまえ、しまえ」と、私のしまうのを急がせた。間もなく後をしまつて、妹と二人で買いに出掛けた。私は妹に「もし核庭の店になかつたら、速くてもカネサまで行くべ(行こう)」と言つたら、「カネサで学校の隣だべ(たろう)」と言いながら核庭の店に着いたが、靴がなかつたからカネサに向かつた。だんだん店が近くなつてきたら、面白がつて妹は「きつとカネサにあるよねえ」と言つた。そのうちにカネサの店に入つた。入るとすぐ目の前に長靴が大きいのやら小さいのやら沢山並べてあった。番頭が出て来て、「何を上げますか」と言つた。私は「小さい長靴を見せてください」と言つたら、小さいのを三つ四つ出して来て、「どれでも二円五十銭です」と言つた。私がおその中の一番大きいのを見て、そのどこにも傷がついてないから、妹にはかせてみたら、かふかふと入るので、これならよいと思つて、「これ一足ください」と一足買つて外へ出た。妹はにこにこしながら「靴は

いて行く」と言つたから、すぐはかせた。はくや否や走つてみたり、すべつてみたりして、何程(ほど)これほど面白いものか、私より先に家へと走つた。私が後から家に帰つたら、もう外へ遊びに出掛けたのでしよう。そこらにいなかつた。こうして朝から外へ出たきり、晩まで一度も来ない。次の朝も人先(他人)より先に起きて、靴をはいて出た。(大正十二年六月号)

■ことばの意味

【土間】屋内で床板を張らず、地面のままにした所。

【番頭】商店で主人に代わり店の一切のことを取りしきる者。

綴方選評

鈴木三重吉

村本君の「酒のみ」は、年級から言えば、たどたどしい書き方ですが、その代わり、どこまでもうぶうぶしく純朴なところがいい気持ちです。

寺田さんの「妹の靴」は、これと言つて、すぐれた点もありませんが、上の年級の人にありがちな、表現上のいやみやなどが一寸もないところがいい気持ちです。

(編集・社会教育課 八木橋直弘)

# 連載 『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本の綴方学校」と言われました。

## 稲刈り

大野小高一 田島たき

私が学校から帰って家に来て、すとも(しとみ戸)に寄りかかって前の田を見渡すと、母が一人で稲を刈っていた。祖母に「おらも行って稲刈りするや。何、まだ夕飯支度するにも早いし」と言うと、祖母は「馬鹿、お前が刈れるなら誰も心配しない。はじめは手を切つて切つて」と言ったが、私は「なして(どうして)手切るってか」と言つて、馬屋に行つて鋸鎌を持って飛んで田に走った。「おらも来たや」と叫んで行くと、母はきろりと見て「稲刈りに来たつて、頼まないこと(頼まないのに)」。行け行け。行つて晩支度(晩ご飯の用意)をしないか。刈れないしてあ(刈れないから)、行け行け」と激しく言ったが、私は刈りた

くて刈りたくて左手に稲を握つて、切れる鋸鎌でざりざりと刈つた。嬉しくて嬉しくて刈つたが、束ね方が分からない。「どうして、きゆうツと回すの」と言う

と、母はあきれたように笑つて「手を切つたつて知らないぞ(知らないよ)。なかなか難しいもんだ(ものだよ)」と言つて、手にとつて教えた。三把まで教えられたが、とてもやれない。だまって母のやるのを見ていれば雑作もないよ。うである。

## 植木

大野小高五 中村かん

(昭和二年五月号)

私は母に教えられないで別の田に行つて、一人でまぢがつては、やりやりしたら、母のやるのと同じとおりにやらされた(やれた)。もう一把やってみようと思つてやってみたら、やはり分かった。「あら覚えて覚えた」と母のところに行つた。母は「どれ、やつてみれ」と行つたので束ねたら、「うん、そうそう」と言つたので、嬉しくて嬉しくて七把刈つた。



大野小で当時行われた「記念(ぎょうねん)」。集中力を高めて心を落ち着かせるため、朝礼などで取り組んだ。全員が目を閉じてじっと静かにしている。



覚えたから母と競争しようと思つて手を早めたら、あつという間もなく小指を斜(ななめ)に切つた。握つていた鎌を田に投げつけて、切つた指を握つて家へと走つた。行くとき母は「それみれ(それみなさい)、人の言うことを聞かないから」と言つた。家に手を握つて入つたら、祖母は「手を切つたべ(切つたらう)」と言つたから、「少しのう(少しね)」と言つたが、やめでやめで(痛くて痛くて)どうにもならない。夕飯の支度はしなければならぬ。痛いと言えば「頼まないことをして」と叱られる。痛い手をして夕飯の支度をした。

ご飯を食う時、「ああ痛い痛い」と手を見ていると、祖母が「どの鎌で刈つたのか」と聞いたから、「一番切れる鋸鎌で」と言うと、顔をしかめて「鋸鎌で切つたら、やめでやめで」と

言つた。その夜は、やめでやめで眠られなかった。  
(大正十三年二月号)

## ことばの意味

【しとみ戸】戸締まりのため家の柱に立て込む上下二、三枚の横長の板戸。昼間は外しておく。  
【鋸鎌】のこぎりがま。稲刈りなどに用いるのこぎりのようにぎざぎざの刃を付けた鎌。

## 綴方選評

鈴木 三重吉

田島さんの「稲刈り」は、年級(学年)のわりに事象に対する把握力が少し不足なので、表現が希薄ですが、しかし、ともかく純朴で一寸もませませした(ませた)ところがなく、子供らしい歡喜などが、いきいきと出ているところが取りえです。

## 自由画選評

山本 謙

中村かんさんの「植木」(推奨主席)―自然を見る目が澄んでいる。その素直な作者の心を何よりとる。植木の一枚一枚の葉が実に生きて動いている。そして植木鉢全体もちゃんと描いてある。

(編集・社会教育課 八木橋直弘)

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館 (旧大野町郷土資料室)

041-1201

北海道北斗市本町2丁目12番7号

TEL (0138) 77-6681

開 覧 9:00~16:00

休 館 毎月第一月曜、年末・年始、臨時



「林芙美子作短編小説に引用」、  
「ラジオ放送に引用」、  
「北海道教育史に掲載」、  
「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵!

『1920年代(大正から昭和初期)の田舎の生活・文化がリアルに表現・・・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう!

(「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数)

- 函館方面→車で、国道227号を通り大野市街地へ入る
- 道北方面→車で、国道5号の大沼トンネルを抜け、10分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み5分で着く



大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会

(略称：文保研・ぶんぼけん)

会長：木下寿実夫

○四一―一二〇一

北斗市本町3丁目11番32号

(0138) 77・8535

合川  
公民館

# 木村文助コーナー開設

## 生活綴り方指導の先駆者

李岱 出身 「日本が学ぶべき時代」

北秋田市合川公民館は合川地区李岱出身で児童の生活綴り方(作文)指導の先駆者といわれる木村文助(1882-1953年)を紹介するコーナーをロビーに設けている。

木村文助は明治15年、に勤め、29歳で小学校訓旧藩台村生まれ。秋田師 導兼校長となる。範学校を卒業後、教員で 児童たちの綴り方教育旧下川治村の小学校などに専念することにも地域

の青少年を対象に冬期間夜学を開設した。大正6年、旧鷹巣町出身で函館師範学校長の和田喜八郎の招きで渡道。翌年、36歳で函館に隣接の旧大野地区(現北斗市)の大野尋常高等小学校訓導兼校長となる。同年、児童文芸雑誌

「赤い鳥」が発刊され、大野小学校から応募の綴り方は毎号のように入選し、「北海道の赤い鳥学校」とまで言われる。昭和2年、その入選作

や論文を含めた文集「綴り方教室・村の子供」を東京から発刊。翌年、他校へ転勤、「漁村職業の全貌」をまとめて名声を高めた。大野小を中心とした実践を次々著す。その後、札幌の中学校などに勤め、昭和28年、森町で亡くなる。

昭和47年、大野文化財保護研究会が発足。同56年、大野町民文化祭で初めて「綴り方」教点を展示。以降、木村の足跡、資料収集などに努め、平成12年、「木村文助研究」

通信の発行開始。同年、大野町公民館を転用した郷土資料室に「赤い鳥・木村文助」コーナーを開設。現在は北斗市郷土資料館となっている。平成19年に「村の子供」発刊80年」と「文助没後55年」の記念事業、文化講演会が開かれている。

今年7月、北秋田市議会運営委員会が北斗市を訪れ、木村を顕彰する郷土資料館を見学したことを縁に、大野文化財保護研究会から譲られた資料などを、先月開催で合川地区が展示部門会場となった市文化祭で紹介。その後、合川公民館での継続紹介となった。

「綴り方教育の父・木村文助」コーナーでは研究会が冊子にまとめた木村に関する年表や研究通信、生家があった李岱の写真などを展示している。元合川町長で詩人の島山義郎さんがまとめた「村の綴り方・木村文助

の生涯」も紹介。同書で島山さんは「今、秋田の教育が、そして日本の教育が木村文助の教育の姿から学ぶべきことが大きいと思う時代のようなので、木村文助の日本一流の綴り方教育の業績の研究会などの誘発などを考え、一石として」と記している。



合川公民館に設ける「木村文助コーナー」